

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16754

研究課題名(和文) 明治後期を中心とする油彩画の和洋融合形態の展開と受容

研究課題名(英文) On the Development of Japanized Oil Painting in the Latter Half of Meiji-Period

研究代表者

石井 香絵 (ishii, kae)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：00732687

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究は明治中期以降における油彩画の和洋融合表現の展開を明らかにすることを目的とし、特に該当する作例を多く制作しているトモ工会(明治35年(1902)-)および関西美術会(明治34年(1901)-)の調査を行った。調査の過程で関西美術会の洋画家であり京都高等工芸学校助教授であった牧野克次(元治元年(1864)-昭和17年(1942))の当該研究に関連する作品および関連資料が多く発見されたため、牧野に関する調査研究を集中的に実施した。牧野のニューヨーク滞在時代の活動、高峰譲吉の別邸内装等の作品調査および遺族所蔵の関連資料について調査を実施した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore the development of Japanized oil painting in the latter half of Meiji-Period. Japanized oil painting was especially made by Tomoe-kai (1902-) and Kansai-Bijutu-kai (1901-), so I researched this two groups of oil painters. The most important result of this study was to find new material about Katsuji Makino (1864-1942), he was a member of Kansai-Bijutu-kai and Assistant professor of Kyoto College of Industry. He stayed New York from 1906 to 1913. Among the time he taught water color painting at New York school of art and made a plan and design of Jokichi Takamine's house. Also I researched his career after returning home.

研究分野：日本近代美術史

キーワード：美術史 近代史 表象文化論

### 1. 研究開始当初の背景

従来油彩画における和洋の融合的表現は高橋由一や五姓田派など、明治初期の洋画の模索段階の結果として、あるいは川村清雄独自の作風として解釈されてきたといえる。扁額や屏風、衝立や掛軸などの日本の伝統的な形態を用いた油彩画は日本画とも洋画とも分けがたく、美術の教育・展覧制度が整うにつれて次第に姿を消していった。明治20年代には洋画家による美術団体が成立し展覧会が主催されはじめるが、青木茂によれば白馬会展（明治29年（1896）～）や太平洋画会展（明治35年（1902）～）においては全く出品されなくなったという（注1）。

しかし実際は明治2、30年代以降も上記のような油彩画は制作されていたが、その多くが関西美術会（明治34年（1901）～）やトモエ会（明治35年（1902）～）という十分には研究の進められてきていない画壇の洋画家であった。このため近代日本における和洋の融合的表現の考察は十分にはなされていない状況であったといえる。

### 2. 研究の目的

本研究では関西美術会およびトモエ会の洋画家を中心に、伝統的形態を用いた油彩画の調査を行い、当時の画家が目指した洋画のあり方および、近代日本における洋画受容の一端を明らかにすることを目的としている。上記の形態は現在では全く見られなくなった絵画のかたちであるが、このかたちが存続しなかった理由は次の二点であると考えられる。一点目は日本の絵画が明治期に日本画と洋画に二分され、中間に位置するような絵画は淘汰されていったという点、二点目は絵画が生活空間のなかで鑑賞されるものからしだいに美術館で鑑賞されるものへと変化していったため（注2）、家屋に飾られる用途に形態を合わせるといった装飾的なあり方から絵画が離れていったという点である。

本研究の特色は、失われていったと考えられる絵画のあり方に焦点を当て、逆にどの時代まで存続し得たか、またどのような作例や受容が存在していたかを考察する試みにある。

### 3. 研究の方法

一次資料の調査と現存作品の現地調査が基本となる。利用機関は、国立国会図書館（本館、関西館）、早稲田大学図書館、東京国立近代美術館アートライブラリ、東京大学総合図書館、京都府立総合資料館、京都府立図書館、京都工芸繊維大学附属図書館、国立新美術館アートライブラリ等。

トモエ会については結成時および全8回の展覧会が開催された期間を目処に『国民新聞』、『都新聞』、『報知新聞』、『読売新聞』等の新聞記事および、『絵画叢誌』、『美術新報』、『日本美術』の閲覧を行い、一次資料の収集に努める。

関西美術会については一次資料の収集は研究開始当初の時点である程度終えているため、該当作品における画家ごとの特色、形態ごとの違い、一次資料で確認できた作例と現存作品との比較などの分析を行う。また、櫻井忠剛と伊藤快彦については該当する現存作品が多く残されているため、京都にて現地調査を行う。

### 4. 研究成果

本研究で確認できた伝統的形態による油彩画を制作した洋画家は以下の通りである。

#### 扁額

川村清雄、伊藤快彦、櫻井忠剛、塚原律子、松原三五郎、都鳥英喜、寺松國太郎、中川八郎、北蓮蔵、小笠原豊涯、大塚知三、吉益耳童、鈴木烏川、須田輝州

#### 衝立・屏風

川村清雄、伊藤快彦、櫻井忠剛、山内愚仙、赤松麟作、二世五姓田芳柳、田村宗立、小笠原豊涯

また本研究は当初想定していなかったが、関西美術会の洋画家牧野克次（元治元年（1864）～昭和17年（1942））の当該研究に関連する作品および関連資料が多く発見されたため、牧野に関する調査研究を集中的に実施した。

牧野は大阪に生れ、住吉貫魚に日本画、勇魚に洋画を学んだ後に上京し、明治21年（1888）に小山正太郎の洋画塾不同舎に学んでいる。大阪で図画の教員であった明治34年（1901）に関西美術会の結成に参加した創立メンバーであった。翌年には京都に移住し浅井忠や都鳥英喜とともに京都高等工藝学校（現京都工芸繊維大学）図案科の助教授となった。牧野は京都の洋画が最も活発であった時期にその一員として基盤を築いたが、ひとりの画家として注目されることはほとんど無く、現存作品も少ない。また牧野は高等工藝学校の学生であった霜鳥之彦（正三郎）とともにニューヨークに渡っているが、ニューヨーク時代の活動は一部紹介されているものの不明な点が多く、また帰国後の活動についてはほとんど知られていない。

本研究では牧野のニューヨーク滞在時および帰国後の活動について調査を進めることができた。また竹田美壽恵氏の協力のもと、遺族が所蔵する関連資料の調査を行った。牧野の年譜、また霜鳥の回想録によれば、牧野は渡米後 New York School of Art（現パーソンズ美術大学）にて水彩画の教員となった時期があったようだ（注3）。さらに当時牧野は化学者として同地で成功をおさめていた高峰譲吉と出会い、明治41年（1908）にニューヨーク郊外に位置する高峰の別邸「松楓殿」の内装を手がけている。松楓殿は現存しており、現地にて見学と撮影を行った。同建

建築物は外観、内観ともに和風の作りでありながら、壁・天井とも牧野による油彩の装飾が施されている。松楓殿はもとは明治 37 年（1904）に開催されたセントルイス万国博覧会の会場に設置された日本館であり、設計はシカゴ万博の鳳凰殿と同じ久留正道、施工は長谷川金太郎である。セントルイス万博の評議員であった高峰は博覧会終了後、別荘として、また日米親交の場として使用する目的で同館を移築した。またこの仕事が縁となり、牧野は明治 41 年（1908）より 4 年をかけて高峰本邸の設計と内装を手がけることとなった。設計は武田五一、内装は澤部清五郎の協力を得るため一時日本に帰国している。高峰邸は外観は洋風で内観は和風であるが、やはり油彩による装飾が採用されている。油絵を採用する理由について牧野は次のように述べている。

「是等の絵画に用ひたる画布絵具等には少なからざる苦心を為したり、日本在来の方法に依れる紙、絹、等は紐育の如き乾燥の土地殊に厳冬尚八十度の温熱を与ふる室内にては到底保存に堪へざるを以て種々の試験と工夫とを凝らし、遂に油画に用ふる強きキャンパスを枠張り、これに金箔を押し古色を帯びさせ、然る後油絵具を以て揮毫することゝなしたり。（注 4）」

キャンパスに油絵を用いたのは日本の在来の方法では耐久性に欠けるためであったことが述べられている。

牧野は水彩画を得意とする洋画家であり、現存する、または図版で確認できる作例もほとんどが水彩画であることから当該研究テーマでは研究開始当初は重視していなかった。本二作は 2012 年に京都工藝繊維大学美術工藝資料館「高峰譲吉邸と京都高等工芸学校」展にて紹介され、高峰邸については 1992 年に目黒区美術館、京都文化博物館「沢部清五郎：絵筆のゆくえ—インテリアへの道」展にて澤部の仕事として紹介されているが（注 5）これらは応用美術を目指し洋画家を指導者に置いた京都高等工芸学校の校風を反映した初期の作例であり、また油彩画を用いた和洋の折衷的表現としては代表的な作例として位置づけ得ると考える。牧野は日本画と洋画を学んでおり、高等工芸学校着任後は武田五一、浅井忠らと平等院の修繕工事に従事するなど伝統的な建築設計に学ぶ機会もあり、高峰との仕事はこれらの経歴が活かされた好例であったようだ。

京都高等工芸学校の実用的な功績としては、校長の中澤岩太の活動や浅井忠を挙げることができるだろう。浅井は簡易で日本画に類似している水彩画の普及に努め、同時に京都の伝統工芸品の図案に洋画の技法を持ち込むなど、和洋折衷のあたらしいかたちを京都にもたらした。特に図案に関しては、留学時に現地で見たアール・ヌーヴォーの手法を

日本にいち早く取り入れた例として注目に値する。しかし浅井のみならず、ニューヨークで展開された牧野や澤部、以下に述べる村山順の活動にもまた同校の特色を見出すことができるだろう。

牧野は高峰邸の制作の他、滞米中 New York School of Art で水彩画の展示を行い、フィラデルフィア、ワシントンでの水彩画展覧会に出品していたようである（注 6）。また霜島によれば、牧野と霜島がニューヨークに到着する半年前に霜島と同期の高等工芸学校卒業生であった村山順（明治 12 年（1879）～昭和 29 年（1954））が先に同地に到着していたという。高等工芸学校図案科一期生であった村山はワイコーネル医科大学に従事した後、大正 10 年（1921）から昭和 16 年（1941）までナショナル・ジオグラフィック社に所属し動物図を制作している。その作例はナショナル・ジオグラフィック社が刊行しているシリーズ National Geographic Society *THE BOOK OF DOGS* 1927、*THE BOOK OF FISHES* 1961 などに残されている。村山は牧野の長女直と明治 43 年（1910）に結婚し、没年まで同地で暮らしている。

牧野は大正 2 年（1913）に帰国後は台湾に滞在した後、年譜によれば大正 4 年（1915）より久邇宮家に仕え、本邸の設計の他、大正 7 年（1918）に東京に移住し「美術其他直属ノ御用ヲ拝承」する立場にあったという。

本研究は当初の予定を変更し、対象とする洋画家の範囲を狭める結果となった。またトモ工会を中心とする東京の洋画家による油彩画の和洋融合形態については十分な調査が遂行できていないため、今後の課題とする。関西における同形態の展開については、本研究の結果以下の系統が指摘できる。一つめは田村宗立などの洋画黎明期の作風がこの地に根付いていた点であり、五姓田派と共通する掛軸に描いた人物像が多く制作されていた背景が指摘できる。近代的な美術教育や制度が東京ほどは発展しなかった同地にとって、黎明期の作風が残りやすかった状況が指摘できる。二つめは櫻井忠剛がもたらした川村清雄の作風がこの地に広まった点である。川村に洋画を学んだ櫻井が故郷の尼崎に戻り、京都に移住した時期は同地に洋画家が多く集まりはじめた時代と重なっており、関西美術会の主要メンバーとなる伊藤快彦や小笠原豊涯、山内愚仙らがおそらく櫻井の影響で扁額や屏風による油彩画の形態を取り入れている。三つめは上述した京都高等工芸学校による応用美術の流れである。その活動例は必ずしも油絵ではないが、洋画の技術を日本の伝統と融合させる試みである点で共通している。

今回の成果をもとに牧野個人の活動歴および作品、資料調査を継続し、同時に関西・関東における網羅的な調査を継続し、明治期の洋画家が担った表現形態の一側面について考察を加えていく。

注

- 1 青木茂「油絵初学明治百十一年 高橋由一の遺作」『油絵初学』筑摩書房、1987 年。
- 2 木下直之『美術という見世物 油絵茶屋の時代』平凡社、1993 年。
- 3 霜鳥之彦『丹青緑 霜鳥之彦回想記』霜鳥之彦画業刊行会、1977 年。
- 4 牧野克次「高峰博士の室内」『京都美術』第 30 号、1913 年。
- 5 京都工芸繊維大学文化遺産教育研究センター編『高峰譲吉邸と京都高等工芸学校』、2012 年。目黒区美術館、京都文化博物館編『沢部清五郎：絵筆のゆくえーインテリアへの道』、1992 年。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

6．研究組織

研究代表者

石井 香絵（ISHII, Kae）

早稲田大学・文学学術院・招聘研究員

研究者番号：00732687